日本年金機構理事長賞　　岐阜県　寺垣　佳南里　様　（高校生　女性）

私の母の兄は一級の精神障害者だ。二十歳の頃病気にかかり、今年で五十歳になる。この間、伯父は『年金』で生活してきた。

私が年金について深く知りたいと思ったのは、学校の授業がきっかけだった。

年金というと一般的には老後に支給される老齢年金のことを思い浮かべる人が多いと思う。私自身そう思い込んでおり、遠い未来のことだと、あまり実感が湧かずにいた。しかし、年金は私たちにとって身近なものだと知った。そして、私の伯父と年金との関わりを知るきっかけとなったのだ。

これは、祖母が胸を痛めながら私にしてくれた話だ。人生は長い道からできている。だからこの道の先に何があるのか、はっきりとは分からない。それは、当たり前の日常の中に突然降りかかってくる、誰も予想しない出来事だった。

伯父は二十歳という若さで統合失調症と診断を受けた。それは、祖母と伯父の心を底知れぬ絶望や将来への不安、悲しみで覆った。さらに、当時の伯父の病状は現実と非現実との境が明確でないため、病識を受け入れるのに十年以上を要した。その間、無年金で入退院を繰り返していた。やっとの思いで主治医に説得していただき、伯父は自分自身の病気と向き合うことができ、受給の対象となることができた。対象外だった十年以上のブランクは大きく、祖母は改めて年金の有難さを痛感したと話してくれた。

「年金のおかげでどれほど助かっていることか。」

何気ない言葉だが本当にその通りだと感じた。今の現状でいうと、祖母は老齢年金をいただいてる身だ。もし、年金がなければ、祖母が伯父のために入院費や生活費を払わなければならないことになる。しかし、祖母にとって医療費などはとてもじゃないが、払える金額ではない。だが、年金という心強い支えのおかげで毎日、負担のない、安心した生活を送らせてもらうことができている。何より、兄や祖母、そして、私も笑顔で暮らすことができている。

突然、今まであった平穏な日々が奪われる時が来るかもしれない。それは自分

の身に起きてみないと実感は湧かないだろう。けれども、それでは遅い。人生の中で後悔することは多い。その後悔は取り返しのつかない方向へ向かうことだってあり得るだろう。そんな後悔を一つでもなくすために、年金を払うという備えもあると思う。

また、私は年金について無知だった時、年金を払うことは賭けをしているようなものだと思っていた。しかし、その概念はくつがえされた。祖母がこんな言葉を言ったからだ。

「支え合うことの大切さが身に染み分かった。」

祖母は国民年金を払い続け、今、老齢年金を得ている。つまり、誰かのために行動すれば、必ずその恩は自分に返ってくるということだ。それを裏付けるかのように、祖母は毎日、手作り商品を作っている。そして、その売り上げを、障害者支援に当てているのだ。私は、そんな祖母を尊敬している。善い行いは回り回って自分の身に返ってくるのだと感じた。そして、みんなで支え合い、助け合いの心が日本中にたくさん溢れたら、一人でも多くの人が幸せに暮らせる社会になるのではないかと思う。私は支え合いの心を大切にして、将来年金を払っていきたい。